

公暁の法名について

館 隆 志

公暁は、鎌倉二代將軍源頼家の遺児であり、源実朝を殺害した張本人としてその名が広く知られている。公暁については残された史料が極めて少なく、不明な点が多いものの、『鶴岡八幡宮記録』や『吾妻鏡』等に散見される記述からは、園城寺僧侶公胤の門弟であったということには問題なからう（拙著『園城寺公胤の研究』春秋社、二〇一〇年）。

幼名を善哉というように、公暁とは出家に際して名付けられた法名である。法名は何らかの理由があって付けられる場合が多く、構成されている漢字から、名付けられた理由をある程度推定することは可能な場合がある。公暁の法名としては、「頼暁」と「公暁」の二つが伝わるが、入滅時の法名が「公暁」であったことからすれば、「頼暁」の法名はそれよりも早く名づけられており、得度の師である定暁が名付けたとみられるため、「頼」は父である頼家から一字、「暁」は定暁から一字と考えるのが自然であろう。そして、定暁に次いで師となったのは公胤であるから、「公暁」という法名は、公胤

から「公」の一字とって、「頼暁」を改め「公暁」と公胤が名付けたと推測される。公暁の法名が付けられた理由や経緯については推定ではあるが、公顕―公胤と「公」の一字が相承されていることからみても、この系統が「公」の字を相承したことはほぼ間違いなく、「公暁」の「公」は「公胤」から名付けられた系字と判断できるだろう。

公暁を「クギョウ」と読むことが、世間の常識として知られるようになってから久しい。一方で、その師である公胤は、昔から「コウイン」と読み慣わしている。すでに述べたように公暁が公胤の門弟であり、その法名の「公」の字が相承されているならば、その読み方も共通していなければならない。「公」を「ク」と読むのは呉音であり、「コウ」と読むのは漢音である。「暁」は呉音で「ギョウ」「ゲウ」、漢音で「キョウ」「ケウ」と読むことになる。一般的には、呉音か漢音で統一して読まれるため、「クギョウ」か「コウキョウ」と読まれていたと考えることができ得る。しかしながら、僧侶の法名

が当時どのように読まれていたのかを確定することは難しい問題である。

例えば、安居院聖覚は長らく「シヨウカク」と呉音で読まれてきたが、当時の史料に「せいかく」と漢音で記されていたため、「セイカク」と読むことが妥当であろうと判断されるようになったのである。このように、当時の史料に読み方まで記されていればよいが、そうでは無い場合は、さまざまな例を挙げてそれを検証する必要があるだろう。

しかしながら、公暁の場合は当時の記録というものがほとんど存在していない。慈円の『愚管抄』には実朝殺害の記事に「此法師ハ、頼家ガ子」とあるが、その法名さえ記されていないのである。

ただし、公暁の法名は公顕、公胤、公暁としてその法名が相承されて付けられたものと推定される。したがって、仮に公顕、公胤の読み方が確定さえすれば、それは公暁の法名に対しても類推して適用されるものと判断され、自ずとその読み方も確定されるものと言えよう。

そこで、まず公顕の読み方であるが、これについては源通親の日記である『厳島御幸記』と『高倉院昇霞記』に記されている。この原本は失われているが、鎌倉中期に書写されたものが東京国立博物館（梅沢記念館旧蔵）に所蔵され重要文化財に指定されている。その中では公顕僧正を『厳島御幸記』

では「こうきむそう正」と、『高倉院昇霞記』では「こうきんそう正」と平仮名で表記している。あるいは、江戸期の写本ではあるが、因幡堂所蔵本の北村季吟書写本が共に「こうけん僧正」と表記している。「公」は漢音で「コウ」と読んでいることから「顕」も漢音で「ケン」と読むと考えられ、「コウケン」が正しそうである。この点、確認したすべての辞典で「コウケン」と記されており、正しい情報が記されていることになろう。

次に公胤の読み方を探てみると、親鸞直筆の『西方指南抄』の中に二カ所で「公胤」と、文字の右に「コウイン」とカタカナで記されている。この記事は公胤が法然に関する夢告を見たことを記したものであり、その中に「公胤」と親鸞直筆で記しているのである。公胤は当時最も名前が知られた僧侶の一人であり、法然の『選択集』に対する反論書『浄土決疑抄』を記した人であったから、親鸞がその名前を知らなかった可能性は考えられない。

公胤がこの夢告を見たと言われる時期は、親鸞は未だ越後に滞在中であるから、この情報は伝聞に基づくと考えられる。したがって、その情報を親鸞に伝えた僧侶も「コウイン」と伝えており、その情報を伝え聞いた親鸞も公胤を「コウイン」と書き記したのである。すなわち、鎌倉期の史料において、公胤が「コウイン」と読まれていたことが確定するのである。

公暁の法名について（館）

ちなみに、「胤」は呉音漢音ともに「イン」であるから、公胤と漢音で読まれていたことになろう。また、公顕と同じように、確認したすべての辞典で公胤は「コウイン」と記されている。

そこで、この考察を踏まえた上で公暁の法名の読み方を考えてみたい。まず、公顕、公胤とともに公を「コウ」と読んでいることから、やはり公暁の公も「コウ」と読む可能性が高いと言えるだろう。したがって、法名を漢音で読んでいたと仮定するならば「コウキョウ」と読むことが相応しいことになろう。しかしながら、これは状況証拠を積み重ねたに過ぎない。

そこで、実際の史料でどのように読まれていたのかを調べてみたい。『大日本史料』四編十四冊の承久元年一月二十七日条には公暁に関する記事が集められている。この中で公暁の法名の読みが記されているのは『承久軍物語』であり、ここでは公暁が「こうきょう」と、貴族を意味する公卿が「くぎょう」とひらがなで記されている。『承久軍物語』は鎌倉期に成立したと考えられている『承久記』の異本ではあるが、江戸期以降に追加された文章を含むことが指摘されている。ただし、『承久記』には諸本があつて、現存する最も古い慈光寺所蔵本や、元和四年刊本等の流布本『承久記』には公暁の読み方は記されていない。

慈光寺に次いで古いと考えられているのが前田尊経閣文庫に所蔵される『承久記』（以下、前田本）であるが、ここには「若宮乃別当公暁」の右に「べつたうこうせう」と記されている。前田本はおおよそ一五五〇年頃までには成立している異本の一つであるが、少なくとも江戸期以前に公暁を「コウセウ」と呼んでいることが確認される。現在確認した史料の中で江戸期以前の読みが確認できるのはこの史料のみになる。ちなみに、江戸の天明年間頃に書写された東京大学史料編纂所蔵『承久兵物語』や、天明二年に書写された東京大学付属図書館所蔵『承久兵物語』にも「こうきょう」とあり、その右に「公暁」と記されていることから、公暁を「コウキョウ」と読むことが当時は違和感が無かったものと推定される。また、この読み方は漢音の読みになり、公顕を「コウケン」、公胤を「コウイン」と読んできたことと一致するのである。

しかしながら、現在この公暁を調べると、明治四十一年（一九〇八）に刊行された『国史大辞典』に「クゲウ」とあるのははじめ、全ての辞書や辞典において「クギョウ」と記されている。『国史大辞典』の出典には「大日本史」と記されているが、明治三十三年（一九〇〇）刊行の『大日本史』には、公暁の読みは記されておらず、その出典として『承久記』『吾妻鏡』『愚管抄』『保暦間記』が記されているのみである。『大日本史』の編纂は徳川光圀（一六二八―一七〇一）によって開

始されたもので、光圀は明暦三年（一六五七）に史局を作って紀伝体の歴史書の編纂作業に着手し、これが光圀の死後に『大日本史』と呼称されるようになったものである。その後、完成まで二百五十年の歳月を費やしているが、本紀と列伝については光圀存命中にはほぼ完成されていた。一方、光圀の発願で、貞享二年（一六八五）に刊行された『新編鎌倉志』巻一「鶴岡八幡宮」の「石階」の記事の中で、公暁の右に「クゲウ」と仮名が振られている。そのため『大日本史』の編纂中、光圀の存命中にはすでに公暁は「コウキョウ」ではなく「クギョウ」と読まれていたと考えられる。

『新編鎌倉志』「引用書目」に記された百十九部の史料のうち、『大日本史』における公暁の出典と重なり、読み方が記されているのは「東鏡」である。「引用書目」には、続いて「東鏡脱漏」として「古本東鏡纂（島津家蔵本）」とあるので、「引用書目」に「東鏡」とあるのは、刊本の『吾妻鏡』を指すと考えられよう。『吾妻鏡』の古活字版としては、慶長十年跋刊伏見版、慶長元和間刊、元和末刊の三種類が現存するが、本論で最も注目すべきは、寛永三年（一六二六）に刊行された寛永版『吾妻鏡』である。その理由は、一つはこの版本が広く流通したことであり、一つには訓点と振り仮名が付されていることである。

そこで、寛永版の公暁の読みを見てみると、ここに「クゲ

公暁の法名について（館）

ウ」と仮名が振られていることが確認されるため、『新編鎌倉志』における「クゲウ」の読みは、寛永版『吾妻鏡』に基づく可能性が高いと言えるだろう。ちなみに、同書においては、公胤は「コウイン」と仮名が振られている。現在、寛永版よりも古く公暁を「クギョウ」と読んでいる史料が見あたらないことから、「クギョウ」の読みが定着した理由の一つとして、寛永版に「クゲウ」と仮名が振られたことを挙げることができよう。

寛永版の仮名がなぜ「クゲウ」と振られたのかは明確にはできない。しかし、それより前、すでに前田家本『承久記』において「こうせう」と、あるいは江戸期においても『承久兵物語』で「こうきよう」と読まれている。さらに、公胤―公胤―公暁という法脈では漢音で法名が読まれていることを踏まえるならば、「クギョウ」ではなく「コウキョウ」と読むことが相応しいと考えるものである。

なお、本論における引用文献の註記は、前掲拙著『園城寺公胤の研究』を参照されたい。

〈キーワード〉 鶴岡八幡宮、公暁、公胤、鎌倉、『吾妻鏡』

（花園大学非常勤講師）